

子どもの気質に関する研究(3)

— NYLSにおける「気質」概念の検討 —

研究企画・情報部 庄司順一

わが国においても子どもの気質についての関心が高まりつつある。本稿では、Thomas, A. と Chess, S.らの、New York Longitudinal Study (NYLS)における気質概念を検討した。その結果、①ThomasとChess以後に発展してきた子どもの気質に関する研究は、おとなの性格(パーソナリティ)研究とはほとんど関係なしに発展してきたと考えられること、②Thomasらは、子どもの行動特徴に関心があったが、はじめから「気質」(temperament)という語を用いたのではなく、初期には、「一次的反応パターン」(primary reaction pattern)という語を使用していたこと、③気質という語がはじめて用いられたのは1963年頃のものであり、それはRutter, M.の示唆によるものであること、④NYLSでは、気質を「行動様式」(behavioral style)と同義であるとし、行動の形式的側面としてとらえるところに大きな特徴があるといえること、⑤気質は多くの人にとってなじみのあることばであり、しかも乳幼児についてはそれまでほとんど論じられたことのない概念であったことが、多くの研究者の関心を引き付けたと考えられることなどを指摘した。

見出し語：気質、子ども、NYLS、一次的反応パターン

A Study on Temperament of Child (3) — A Discussion on the Concept of Temperament in NYLS —

Junichi SHOJI

There are growing concern on the temperament of infant and young children in Japan since our first introductory paper in 1981. The author discusses the development of the concept of temperament in the New York Longitudinal Study, started in 1956 by A. Thomas and S. Chess and colleagues, that facilitates recent research of this theme. The term "primary reaction patterns" was used at first, and then, at about 1963, the term "temperament" was appeared, based on suggestion by M. Rutter. The term "temperament" was familiar, however, research had little done until that time. It is thought that many researcher was attracted the term, as well as growing recognition on importance of the infant behavioral characteristics in interaction with parents.

Key words: Temperament, Child, NYLS, Primary reaction patterns

近年子どもの気質についての研究が大きな関心をもたれているが、気質概念の有用性について、Rutter(1982)¹⁾は、①行動の個性(behavioral individuality)を認め、明確に示したこと、②行動発達における遺伝的・素質的要因の関与を認めたこと、および③問題行動の発生の予測に役立ち得ることの3点を指摘した。このように、気質の概念は、子どもの行動発達に関して、理論的にも、また実際的にも、興味深く、重要な意義を有していると考えられる。

筆者らは、1981年に、Thomas, A. とChess, Sらがはじめた、ニューヨーク縦断的研究(New York Longitudinal Study, NYLS)とよばれる子どもの気質に関する研究と、これにもとづくCarey, W.の気質質問紙を紹介した(庄司・前川, 1981)²⁾。それ以後、わが国においても子どもの気質についての研究が増加しつつある。しかし、その概念や定義、測定・評価法などに関する論争がつついている。したがって、それらの課題について改めて検討するのは意義があることだと思われる。その出発点として、本稿では、NYLSにおける子どもの気質の概念について検討する。

I 子どもの気質研究の歴史

人間の性格、気質についての関心は人類の歴史とともにあったと思われるが、最初にまとまった記述がなされたのは古代ギリシアにおいてである。テオフラストスの『人さまざま』や、ヒポクラテス、ガレノスらの体液と気質との関係についての記述はよく知られている。

19世紀後半に科学的な学問として心理学が成立したのち、性格心理学あるいはパーソナリティ心理学も徐々に発展してきた。しかし、それらは成人を対象としたものが主であり、子ども、とくに乳幼児の気質(あるいは性格、パーソナリティ)と、その形成、発達についての研究はほとんどなかった。

最近の子どもの気質研究にもっとも大きな影響を与えたのは、ThomasとChessらのニューヨーク縦断的研究(NYLS)である。1930年代にGesell, A. やShirley, M. M.らの乳幼児の行動特徴やパーソナリティ特徴の個人差についての研究があった。しかし、彼らの研究はそれほど注目を集めなかったし、NYLSにも直接の影響は与えなかった。つまり、ThomasとChessらの研究は、成人についての知

見を乳幼児に適用したというのではなく、また先行研究に大きく依存したのでもない、独創性にとんだものであったといえよう。わが国では、オルポートのパーソナリティ心理学やクレッチマーの気質理論がよく知られているが、NYLSをはじめとする1950年代以後に発展してきた子どもの気質に関する諸研究は、おとなの性格(パーソナリティ)研究とはほとんど関係なしに発展してきたといえるように思われる。

II NYLSにおける気質概念

1. 研究の背景

まず、ThomasとChessらが子どもの気質を研究するにいたった背景を述べる。

Alexander Thomas(1914-)はニューヨーク大学医療センターの精神科教授であり、その精神科部門であるベルビュー病院の責任者でもあった。Stella Chess(1914-)は、同じく児童精神科教授であった。現在では二人とも引退している。彼らは個人的生活をともにしている。

彼らの主要な業績は、第1に、30年を越える長期縦断的研究(NYLS)を実施し、研究者や臨床家に子どもの気質への関心をもたらししたことであるが、Annual Review of Child Psychiatry and Child Developmentの編集を行ってきたも重要である。これは、児童精神医学および児童心理学の専門家にはよく知られている、大変有用な論文集で、1968年以来、毎年刊行されている。また、Chessは自閉症の研究者としても立派な業績があり、“An Introduction to Child Psychiatry”(「児童精神医学入門」)というすぐれた教科書も執筆している。

ThomasとChessは、子どもの気質に関して、数多くの論文を著すとともに、6冊の著書を執筆し、そのうち1冊は邦訳されている(Thomas, Chess, Birch, Hertzog, and Korn, 1963; Thomas, Chess and Birch, 1968; Thomas and Chess, 1977; Thomas and Chess, 1980; Chess and Thomas, 1984; Chess and Thomas, 1986)^{3)~8)}。

ThomasとChessが子どもの気質に関心をもった背景については、次のことが述べられている(Chess, 1975)⁹⁾。

第1に、4人の子どもの親としての経験から、子どもたちはそれぞれ生まれたときから行動の仕方に

ちがいがみられることを知ったという。第2に、彼らが精神科医としての訓練を受けた1950年代は精神分析学および学習理論が主流で、これらはいずれも子どもの生後の経験の重要性を指摘するものであった。その生後の経験を主に規定するのは親(母親)の養育態度である。しかし、ThomasとChessは、臨床家としての経験を重ねるにつれて、環境の影響だけでなく、子ども自身の行動特徴も問題行動の発生に重要であると考えようになってきた。子ども自身の行動特徴に目を向けるようになったのは、Chessの師であるLauretta Benderの影響があるかもしれない。わが国ではベンダー・ゲシタルト・テストで知られるBenderは1930年代から1950年代に活躍した児童精神科医であるが、環境要因のみならず、身体的あるいは素質的要因の重要性を認めた、中庸の立場をとっていた¹⁰⁾。

ThomasとChessは、1952年から準備をはじめ、1956年3月から、以後30年以上も継続するNYLSを開始した。これは、ニューヨーク近郊に居住する133名の乳児を対象とした、大規模で長期にわたる縦断的研究である。研究対象の募集は1956年から62年まで行われた。研究方法は、親との面接を主とし、これを子どもの直接観察で補完するというもので、子どもが生後3カ月のときより開始した。生後1年までは3カ月ごとに、その後は6カ月ごとに親との面接を行い、子どもの行動について詳しい資料を得た。対象児が成人した時点でも129名が研究に協力していた。青年期以後は、16-17歳、18-23歳、25-31歳の時点で本人に面接を行っている¹¹⁾。このほか、プエルト・リコの労働者階級、イスラエルのキブツの子どもたち、未熟児、発達遅滞児、先天性風疹症候群の子どもを対象とした研究も行っている。

2. 「一次的反応パターン」から「気質」へ

Thomasらは、子どもの行動特徴に関心があったが、はじめから「気質」(temperament)という語を用いたのではない。初期には、「一次的反応パターン」(primary reaction pattern)という語を使用していた。

NYLSについての論文が現れてきたのは1950年代末からであった。最初期には「持続的で、安定した、固有の反応パターン」(consistent, stable, intrinsic reaction patterns)(Chess and Thomas, 1959)¹²⁾や「特定の、固有の反応パターン」(the specific intrinsic pattern of reaction)

(Chess, Thomas, and Birch, 1959)¹³⁾という一般的な表現が用いられ、まだ術語としては提案されていない。

1960年以後は、「一次的反応パターン」(primary reaction pattern)(Thomas, Chess, Birch, and Hertzig, 1960)¹⁴⁾、あるいは「一次的反応型」(primary reaction types)(Chess, Thomas, Birch, and Hertzig, 1960)¹⁵⁾、「反応性の一次的特徴」(primary characteristics of reactivity)(Thomas, Birch, Chess, and Robbins, 1961)¹⁶⁾、「一次的反応特徴」(primary reaction characteristics)(Birch, Thomas, Chess, and Hertzig, 1962)¹⁷⁾などの表現が用いられた。

「一次的」(primary)としたのは、出生直後から、何らかの外的要因の結果と思われないうちから個性(individuality)が認められるからであった。彼らが注目したのは、発達とともに変化する行動内容(behavior content)ではなく、変化しない、反応の形式的パターン(formal pattern of reactivity)であった¹⁴⁾。例えば、摂食行動を例とすると、何をするかという行動の内容とは、母乳やミルクを飲む、離乳食を食べる、スプーンが使える、箸が使えるなどのことであり、これらは発達的に変化していく。これに対して、飲む(食べる)速さや、温度・味への敏感さなどの特徴は発達とともに変化するとはいえない。ThomasとChessらは、行動の内容ではなく、反応の形式的側面に注目したのである。

「気質」(temperament)という語がはじめて用いられたのは1963年頃のものである(Chess, Thomas, Rutter, and Birch, 1963; Thomas, Chess, Birch, Hertzig, and Korn, 1963)^{18) 3)}。なお、「気質」という語を提案したのはMichael Rutterである(Chess and Thomas, 1986, p. x)⁸⁾。Rutterが筆頭著者になっている論文では、1963年は「一次的反応パターン」が用いられ、1964年には「気質」が用いられた(Rutter, Korn, and Birch, 1963; Rutter, Birch, Thomas, and Chess, 1964)^{19) 20)}。

研究が進むにつれて、「一次的反応パターン」という表現はあまりに「狭く、機械的な」感じがしてきたという(Thomas, A. and Chess, 1977, p. 8)⁵⁾。「一次的」という語は、出生前や周産期の行動や、遺伝的、内分泌的、あるいは神経生理的な基礎的要因が個人差を原因であることを想定させかねない。また、「反応」という語は、環境と相互作用を行う能動的で、独立した仕方よりも、受動的で、2次的

な役割しか示さないように思える。そこでRutterの示唆にしたがって、「気質」という語に代えることにしたのである。

「気質」は多くの人にとってなじみのあることばであり、しかも乳幼児についてはそれまでほとんど論じられたことのない概念であったことが、多くの研究者の関心を引き付けたともいえるだろう。

3. NYLSにおける気質概念

NYLSにおける気質概念は、上述のように、一般に知られている、主として成人についての心理学者（例えばオールポート）や精神医学者（例えばクレッチマー）の気質概念を乳幼児に適用したものである。そうではなく、乳幼児の行動の個性を記述する研究を進める中で、「一次的反応パターン」ということばよりも、もっと適切な表現として「気質」ということばにたどりついたといえよう。

III NYLSにおける気質概念の特徴

1. 行動様式

NYLSでは、気質は「行動様式」(behavioral style)と同義であるという(例えばThomas and Chess, 1977, p. 9)⁵⁾。どちらも、WHAT(能力や行動内容)やWHY(動機づけ)ではなく、行動のHOWのことをいっている。つまり、気質は、何を(what)するか、どれくらいうまく(how well)するかという「能力」(ability)や、なぜ(why)するかを説明する「動機づけ」(motivation)とは異なり、個人が行動する仕方(way)に関するものである。

気質は現象記述的な語であり、その起源(遺伝)や不変性を含意するものではない。知能や身長、体重のように環境要因の影響を受け、発達過程で変化し得るものであるという。

このように、気質を行動の形式的側面としてとらえるところにNYLSの大きな特徴があるといえる。このことは、はじめは「一次的反応パターン」ということばが用いられたことにも示されている。

乳幼児に関する従来の研究のほとんど「能力」についてであり、気質についての研究の道を開いたNYLSの意義は大きいといえる。

2. 気質特徴の9カテゴリ

子どもの気質は具体的には9カテゴリで記述される。これは、最初の22名の乳児の親の面接記録の内

容を分析し、客観的に評価する気質の特徴として抽出されたものである。それらは、①活動水準(activity level)、②周期性(rhythmicity)、③接近・回避(approach or withdrawal)、④順応性(adaptability)、⑤反応性の閾値(threshold of responsiveness)、⑥反応の強さ(intensity of reaction)、⑦気分の質(quality of mood)、⑧気の散りやすさ(distractibility)、⑨注意の範囲と持続性(attention span and persistence)、である。この9カテゴリについてはよく知られているので、ここで詳しく述べることはしない。初期の論文では、注意の範囲と持続性が選択性(selectivity)という表現になっていたが、内容的なちがいはない^{13) 15)}。

IV 気質概念の普及の背景

「気質」ということばが乳幼児研究で普及したのは、もちろん、ThomasとChessらの研究が有意義なものであると思われたことが大きい要因であろうが、当時の発達研究において、環境要因だけでなく、子どもの生物学的(あるいは素質的)要因に関心がもたれるようになったこと、また、母子関係理論の発展により、母子関係を相互的なものととらえ、相互関係の一方の主体である子ども自身の要因を考慮すべき必要性が認識されたことも背景要因として指摘することができるだろう。

Thomasらの子どもの気質研究の内容としては、気質の特徴の9つのカテゴリのうち、周期性、接近・回避、順応性、気分の質、反応の強さの5カテゴリにおける特徴の現れ方から、子どもの気質を①手のかからない子ども(easy child)、②手のかかる子ども(difficult child)、③時間のかかる子ども(slow-to-warm-up child)という3つのタイプに分類したことや、「適合の良さ」(goodness of fit)という発達の相互作用モデルを提案したことなども重要である。これらを含め、NYLSの意義については改めて検討したい。

文 献

- 1) Rutter, M.: Temperament: Concepts, issues, and problems. In Porter, R. & Collins, G. M. (Eds) Temperamental differences in infants and young children. London: Pitman, 1982

- 2) 庄司順一・前川喜平：乳児の気質—その意義と評価法—。小児科診療, 44: 1225-1232, 1981
- 3) Thomas, A., Chess, S., Birch, H. G., Hertzog, M. E., and Korn, S.: Behavioral individuality in early childhood. New York: New York University Press, 1963
- 4) Thomas, A., Chess, S., and Birch, H. G.: Temperament and behavior disorders in children. New York: New York University Press, 1968
- 5) Thomas, A. and Chess, S.: Temperament and development. New York: Brunner/Mazel, 1977
- 6) Thomas, A. and Chess, S.: Dynamics of psychological development. New York: Brunner/Mazel, 1980. 林 雅次(監訳): 子供の気質と心理的発達. 星和書店, 1981
- 7) Chess, S. and Thomas, A.: Origins and evolution of behavior disorders: Infancy to early adult life. New York: Brunner/Mazel, 1984
- 8) Chess, S. and Thomas, A.: Temperament in clinical practice. New York: The Guilford Press, 1986
- 9) Chess, S.: The conception, birth, and childhood of a behavioral research: The New York Longitudinal Study. in Anthony, E. J. (Ed.): Explorations in child psychiatry. New York: Plenum Press, p.183-192, 1975
- 10) 牧田清志: 序. 林 雅次(監訳): 子供の気質と心理的発達. 星和書店, 1981. (文献6)
- 11) Tubman, J. G. and Lerner, R. M.: Continuity and discontinuity in the affective experiences of parents and children: Evidence from the New York Longitudinal Study. Amer. J. Orthopsychiat., 64: 112-125, 1994
- 12) Chess, S. and Thomas, A.: The importance of nonmotivational behavior patterns in psychiatric diagnosis and treatment. Psychiatric Quarterly, 33: 326-334, 1959
- 13) Chess, S. and Thomas, A., and Birch, H. G.: Characteristics of the individual child's behavioral responses to the environment. Amer. J. Orthopsychiat., 29: 791-802, 1959
- 14) Thomas, A., Chess, S., Birch, H. G., and Hertzog, M. E.: A longitudinal study of primary reaction patterns in children. Comprehensive Psychiatry, 1: 103-112, 1960
- 15) Chess, S., Thomas, A., Birch, H. G., and Hertzog, M. E.: Implications of a longitudinal study of child development for child psychiatry. Amer. J. Psychiat., 117: 434-441, 1960
- 16) Thomas, A., Birch, H. G., Chess, S., and Robbins, L. C.: Individuality in responses of children to similar environmental situations. Amer. J. Psychiat., 117: 798-803, 1961
- 17) Birch, H. G., Thomas, A., Chess, S., and Hertzog, M. E.: Individuality in the development of children. Developmental Medicine and Child Neurology, 4: 370-379, 1962
- 18) Chess, S., Thomas, A., Rutter, M. and Birch, H. G.: Interaction of temperament and environment in the production of behavioral disturbances in children. Amer. J. Psychiat., 120: 142-148, 1963
- 19) Rutter, M., Korn, S., and Birch, H. G.: Genetic and environmental factors in the development of "primary reaction patterns." Brit. J. Soc. Clin. Psychol., 2: 161-173, 1963
- 20) Rutter, M., Birch, H. G., Thomas, A., and Chess, S.: Temperamental characteristics in infancy and the later development of behavioural disorders. Brit. J. Psychiat., 110: 651-661, 1964